「日々の理科」（第 4437 号） 2026,10,-3

「秋の北極圏旅行記（18)」

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中　千尋　Chihiro Tanaka



ノルウェーから約４時間半、無事にイェリバーレ駅に到着しました。驚くべきことに、ほぼ定刻に到着しました。これは非常に珍しいことです。



この電気機関車は客車牽引用で、それほどの馬力はありませんが、それでもフィヨルド沿いの鉄道としては急傾斜を、難なく上下していました。



列車は数分の停車後、定刻でルーレオに向けて出発していきました。恐らく途中のボーデン駅での、ストックホルム行き寝台列車に接続できるでしょう。



この日はノルウェー往復列車旅行の記憶に加え、オーロラの出現にも遭遇しました。



これがオーロラの「出始め」の様子です。非常に淡い光の帯が、北西～北～北東の方位に、「虹のように」アーチ状に見え始めるのです。

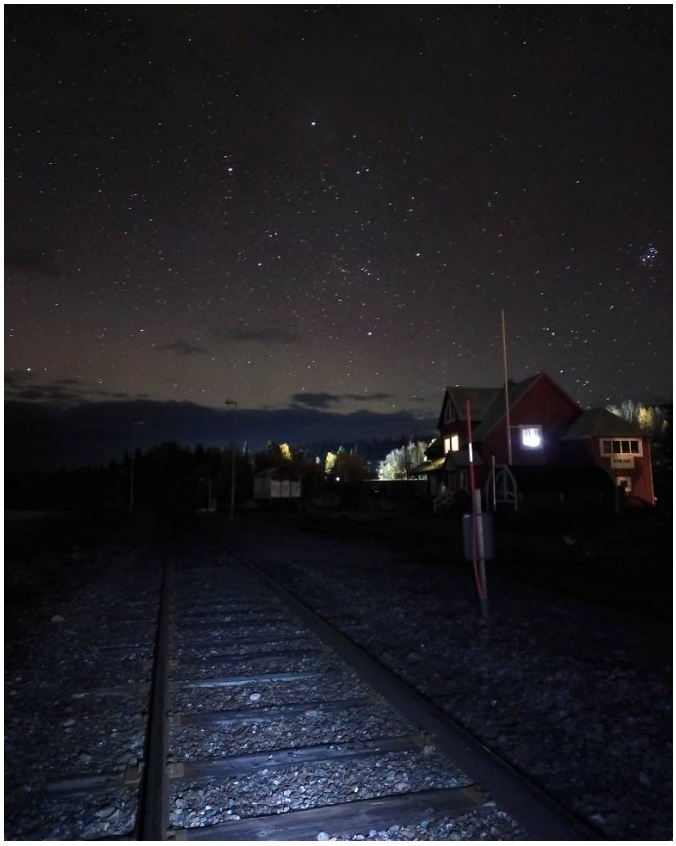


写真には緑色に写っていますが、出始めのオーロラは、白っぽく見えることが多いです。線路に三脚を立

てて撮ったので、こんな写真になりました。



日によっては、オーロラの出始めに、肉眼でも空が紫色に見えることがあります。実はこれもオーロラです。オーロラの最上端が紫色をしているのが原因です。特に秋と春にこのような現象がよく見られます。この色の空が出現したら、明るいオーロラ出現の予兆です。



冬は零下 40℃にもなりますが、秋はせいぜい 0℃までしか下がりません。冬に比べればずっと楽ですが、それでも私は秋の北極圏の寒さを少々なめていました。パジャマの上に、ありったけの服を着込んで、まるで「焼き豚」のような姿に。マフラーも持参しなかったので代わりのタオルを顔と首に巻いて、テロリストのような姿で線路の上でオーロラを待ちました。

今回の秋の北極圏旅行にはいくつかの目的がありました。20 回以上訪れたスウェーデンの北極圏ですが、９月の訪問は初めてです。まずは、秋の北極圏とはどんな風景なのか。冬はほぼ一日中真っ暗ですが、今の時期はまだ夜と昼が半々で、昼の風景も堪能できるのです。二つ目は、22 年前にこの地に設置して観測を続けている、「オーロラ観測カメラ」のメンテナンス。５台のカメラの整備、再設置をしました。そして三つ目が、「秋のオーロラ」の観望です。



この地は１１月から翌年の４月まで、湖は完全に結氷します。しかし今の時期はまだ湖は凍っていません。その湖面に、オーロラが反映するのです。その様子を、写真だけでなく、自分の目（肉眼）で観たかったのです。果たしてその願いは、ノルウェーから戻ったこの夜に叶いました。



徐々に強まる「バンド・オーロラ（帯状のオーロラ）」それにつれて、湖面に反映するオーロラが見え始めました。私だけでなく、同行者全員がこの「オーロラのリフレクション」を肉眼で観ることができたのです。本当にこんな光景が地球には存在するのですね。